

実践報告

名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践(2)

ー2017年度の実践活動を中心にしてー

松岡是伸*

北星学園大学社会福祉学部福祉計画学科

Keywords：子どもの学習支援 子ども食堂 子どもの居場所

1. はじめに

現在、日本全国で子どもの学習支援や子ども食堂、子どもの居場所づくり実践は展開されている。子どもの学習支援や子ども食堂、子どもの居場所づくりに対しては明確な定義や意味が存在しているわけではない。例えば、子ども食堂をみれば、低額で料金をとるところもあれば、無料のところもある。子どもの学習支援では、生活困窮世帯や生活保護世帯に限定しているところもあれば、そうではないところもある。しかしながら全国的な実践や動向をみる限り、子ども食堂や学習支援、居場所づくりは、子どもたちに対して「学習」、「食」、「居場所」という場を「地域」に設けて実践・展開されていることが構成要件といえるであろう。

本稿で実践報告となる名寄市は、北海道北部地域の中央に位置する過疎積雪寒冷地域である。人口規模は約2万8千人であり、近年減少傾向にある。児童生徒数も減少傾向にあるものの、市立大学を有する教育の街ともいえる(詳細は、松岡 2017:110を参照)。

このような中、2016年度にスタートした名寄市の子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践は、2017年度の新たな取り組みを踏まえ現在に至っている。2017年度の新たな取り組みは、本稿では取り上げず別稿に譲るが、それは生活困窮世帯を対象とした学習支援の取り組みである。小さな地方都市における子どもと家庭に対する「学習」、「食」、「居場所」を通じての交流・支援は、ややもすれば都市部の豊富な社会資源、人的資源等と比較すれば、かすんでしまうかもしれない。結論を先取りすれば、そうではない。その地域の人々の互酬性(転移、贈与等)は、その地域の意識や文化、歴史、問題意識等に強く影響を受ける。この小さな地方都市で子どもの学習支援と子ども食堂、子どもの居場所づくりが継続できているのは、地域の力とこれを仕掛けた行政や大学、社会福祉協議会等の力とつながりであったといえる。

そこで本稿では、名寄市で展開される子どもの学習支援・子どもの食堂・子どもの居場所づくりの2017年度の実践活動の記述することが目的である。

以下では、名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの場合、本プロジェクト、またはプロジェクトとして総称する。また学生ボランティアは、本稿ではメンバーという名称になっている。

なお、本稿は松岡是伸(2017)「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践ー地域における各機関・団体の連携とスティグマの払拭を願ってー」『名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター』第1号の実践報告の続編となる。そのため本プロジェクトの成り立ちや目的、2016年度の実践報告等の詳細については、そちらを参照いただきたい。

*責任著者 E-mail: y-matsuoka@hokusei.ac.jp

2. 名寄市のプロジェクトの概略と2017年度の変更点

1) プロジェクトの概略

名寄市におけるプロジェクトの全体像を明らかにするため、そのねらいや方法を示していきたい。まず、プロジェクトを支える3つの取り組みについて説明する。

（1）子どもの学習支援「もっちもち」の概要

子どもの学習支援「もっちもち」の主なねらいは、①子どもに対して地域で勉強をする機会と場を提供する。②大学生やボランティアとともに学ぶことで学習習慣や学びなおしを支援していくことである。予想される主なプロジェクトの効果は、地域という場において学習や勉強する機会を提供できることから、主に子どもらの将来の成長を促進・投資することになる。主な方法は3つである。まず、学生メンバーが子どもの学習を側面的に教えることで共に学び合うことである。「側面的に教える」とは、子どもたちに学習を教え込むのではなく、一緒に課題に取り組むことである。子どもたちの「わからない」に付き添い、一緒に考えるかたちで接する。次に、学習のための教材は基本的に子どもの持ち込み教材を使用することである。最後に、子どもたちが学習に乗り気ではないときは、一緒に遊んだり、学習以外のお話をして過ごすことである。この点は本プロジェクトの学習支援が、学習塾や家庭教師と差別化した点である。

（2）子ども食堂「だだちゃ」の概要

子ども食堂「だだちゃ」の主なねらいは、①子どもに対して地域で食を提供する場と機会を設ける、②子どもたち自らが食事を料理する機会も提供する。③食育の観点から子ども自らが調理法を習得し、将来（成人）の健全な生活習慣へとつなげる機会を提供することである。予想される主なプロジェクト効果は、地域で食を提供する機会を設けることから、主に子どもの欠食や孤食などの断ち切り、健全な成長・生活習慣の獲得へつなげることである。

主な方法は2つである。ひとつは、食事を「一緒にづくり、一緒に食べる」ことである。食べることに乗り気ではない子どもたちとは、その時間や場を学生メンバーと一緒に付き合い、子どもに寄り添う。もうひとつは、学生メンバーと食事を一緒につくることを基本とする。2017年の調理参加について、子どもたちの調理参加に関しては配膳や下膳のみとした。

（3）子どもの居場所づくり「すぴか」の概要

子どもの居場所づくり「すぴか」の主なねらいは、子どもに対して地域の居場所（場）を提供することである。予想される主なプロジェクト効果は、子ども（や家庭）に対して地域の居場所という「場」を提供することで、ひとりでも友達とでも過ごせる場を地域の中で確保することである。また子どもの居場所づくりでは、子どもがただ過ごすための場（場所）を地域の中で見出すという観点からおこなわれた。それは、無理をして勉強に取り組んだり、誰かと遊んだりする必要がない場を提供することである。

2) 2017年度の変更点

2017年度の変更点は主に2つである。第1に、2016年度は元名寄市立大学松岡研究室が主体で実施していた。そのため組織的な対応等というよりは手弁当的なところがあつたが、2017年度から名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターが運営をコーディネートすることとなった。これによって各機関、組織との連絡調整の円滑化や幅広い学生メンバーの募集、情報発信・収集の業務の充実が図られることとなった。また2017年度より北星学園大学社会福祉学部松岡研究室と連携し実施された。第2に、子どもの学習支援の単独開催の中止である。これは生活困窮世帯をターゲットにした子どもの学習支援を開催するため、本年度は開催を見合わせた。生活困窮世帯に対する子どもの学習支援の成果報告については別稿に譲る。

なお名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターは、2016年度発足し2017年度から本プロジェクトをセンター事業として開始する。センターの役割は、大学と地域社会、教育・研究・実践の橋渡し拠点となり、社会連携・社会貢献することである。そのため大学から地域へと今後の発展性も大いに期待できるであ

ろう。

3) 2017 年度の実施体制

これまでみてきたように、2017 年度の変更点を踏まえ、実施体制を図-1 のようにした。まず、これまでの本プロジェクトを直接的に引き継ぐのは、プロジェクト A となる。次にプロジェクト B は、生活困窮世帯の子どもにフォーカスした学習支援を本年度より開始する。これらの実施体制は、前年度確立した連携体制を基盤として実施される。

付け加えれば、プロジェクト A の学習支援は、対象を限定せず、広く地域の子供たちに参加してもらうジェネラルなものである。そのうえでプロジェクト B では、生活困窮世帯の子どもたちを対象に学習支援をおこなう。そのためプロジェクト B はアフーマティブ（積極的優遇）な事業の展開となる。この二つのプロジェクトが両輪となって、まず「プロジェクト A の実践」で広く地域実践を行い、「プロジェクト B の実践」でスティグマを付与しないように、生活困窮世帯の子どもの学習支援を展開する。地方都市においてスティグマを払拭するためには、プロジェクト B だけでは地域の中で目立ってしまう恐れがある。

以上のように本プロジェクトは、図 - 1 のような体制で実施された。

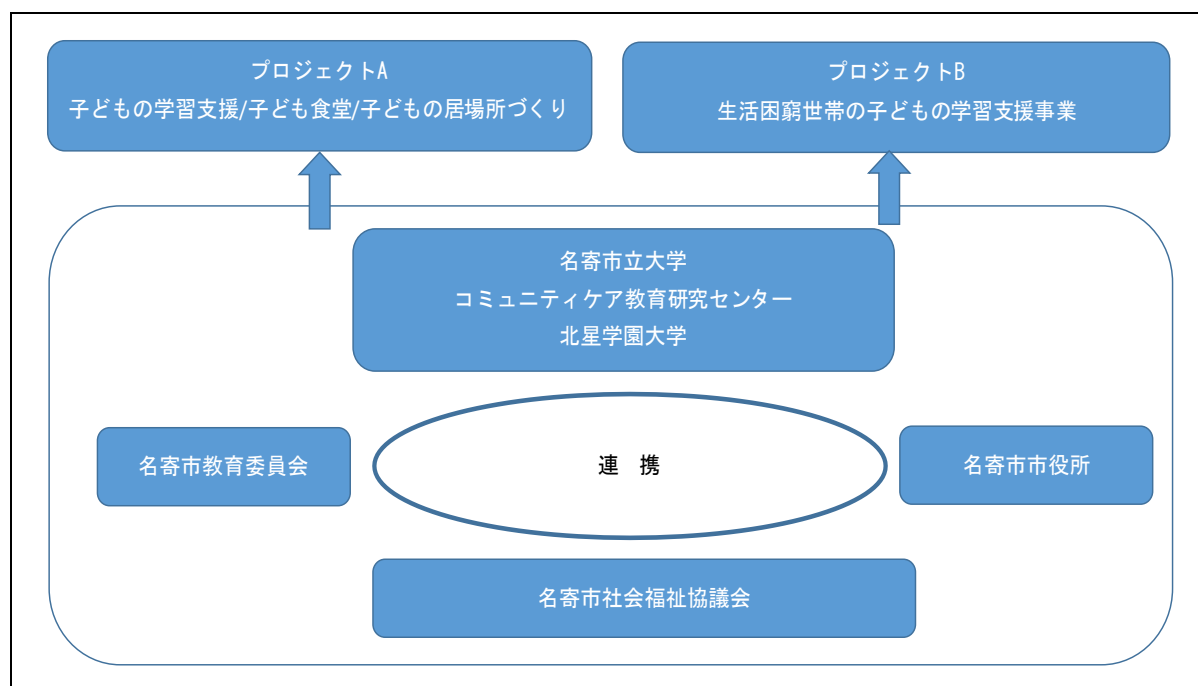


図 - 1 2017 年度 実施体制

3. 結果

1) 2017 年度の開催状況

(1) 子どもの参加者数

本年度の子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの開催は、計 4 回であった。参加者数は、子どもが延 79 名、平均 18.5 名、学生メンバーが延 34 名、平均 8.5 名であった。

子どもの参加数は、第 1 回（2017 年 8 月 8 日）は 38 名、第 2 回（10 月 22 日）は 13 名、第 3 回（2017 年 12 月 17 日）は 16 名、第 4 回（2018 年 2 月 17 日）は 12 名であった。そのため子どもの参加数は、初回（第 1 回）に集中しており、第 2 回から第 4 回の参加数では、平均 13.6 名であった。ちなみに初回（第 1 回）に参加者が多い要因は主に 2 つあげられた。ひとつは、夏季休暇期間であったため比較的子どもや保護者（送

迎等)の都合がつきやすく参加数の増加へつながった。ちなみに名寄市(並びに近隣市町村)以外からの参加者もみられた。

もうひとつは、昨年度から継続的に参加してくれた子どもたちが参加してくれたためであった。昨年度の最終開催(2017年2月)から約半年が経ってからの開催であったため、久しぶりの開催ということで参加者が増加したといえる。実際に、子どもたちからは、久しぶりの開催を喜んだり、「なぜ開催しなかったのか」という質問も受けることとなった(なお開催の様子は写真1~4を参照のこと)。

(2) 子ども食堂の状況

子ども食堂では、食事中はお話をしながら楽しく食べている様子であった。そのなかで2016年度(昨年度)までは少しでも調理に参加してもらい、後片付け、皿洗い等にも参加してもらっていた。2017年度は、第1回目(8月8日)以降は、調理過程に子どもたちが参加する機会がなくなった。そのため子どもたちから「調理したい!」や「お手伝いしたい~」等の要望がみられた。また学生メンバーの記録のなかには、はじめて出会う子どもたち同士がコミュニケーション取るためにも「調理から参加する方がよいのではないか」という意見がみられた。また食事中、話し夢中になり食事が疎かになることや、食事もそこそこに歩き回ったり、食事中の友達にちょっかいをかけたりする子どもの様子がみられた。表-1は2017年度の子ども食堂のメニューである。

表-1 2017年度子ども食堂のメニュー

子ども食堂のメニュー	
2017年8月8日	カレーライス サラダ メロン スイカ
2017年10月22日	ミートスパゲッティ サラダ コーンスープ
2017年12月17日	【クリスマスメニュー】 サンタオムライス クリスマスリースサラダ デコカップケーキ
2018年2月17日	カレーライス サラダ みかん

(3) 子どもの学習支援・居場所づくりの状況

子どもの学習支援では、学習に取り組むものの集中力が欠けてしまったりする子どもがいたが、勉強する子どもたちは概ね学生メンバーとともに学習に取り組んでいた。子どもの居場所では、子どもたちは鬼ごっこや座布団タワー(座布団を積み重ねタワーにみたてること)、折り紙等学生メンバーと遊んで過ごしていた。

このような取り組みの状況の中で子どもの学習支援と居場所は、空間的に同じ場所で展開している。そのため集中して学習したい子どもたちにとっては騒がしいと感じる場合もみられた。これらのことから空間や時間分け等をして学習環境を整える仕組みをつくることが今後と課題となる。

本プロジェクトの様子



写真1 本プロジェクトのウェルカムボードとのれん



写真2 カレーライスの盛り付けをする子どもたち



写真3 学習する子どもたち



写真4 子ども食堂の様子

(4) 保護者への予備的アンケート調査の実施

2018年2月17日に本プロジェクト開催時に送迎した保護者7名に対して予備的アンケートを実施した。この予備的アンケートは、次年度以降の本プロジェクトにて行う効果測定のための予備的調査であった。また今後の活動に役立てるために実施された。以下では予備的アンケートの結果を見ていきたい。

①属性

本予備アンケートの回答者の属性は、回答者はすべて女性であった。年齢は、30歳代が62%であった(30歳代前半29%(2名)、30歳代後半43%(3名))。その他40歳代前半14%(1名)、60歳代14%(1名)であった。子どもとの関係では母親が86%(6名)、祖母が14%(1名)であった。

②本プロジェクトについて

本プロジェクトについては、概ね肯定的回答であった。

- ・「本プロジェクトについてどのように思うか」では、「とても良い」が86%(6名)、「やや良い」が14%(1名)であった(N=7)。

③子ども食堂について

子ども食堂に対しては3つの設問を行った。概ね肯定的な回答が多くみられた。少数ではあるが、開催頻度が少ないという意見もみられた。

- ・「今後も子ども食堂についてお子さまを参加させたいと思いますか？」では、「ぜひ参加させたい」が86%(6名)、「やや参加させたい」が14%(1名)であった(N=7)。
- ・「子ども食堂にお子さまを参加させる動機は何ですか？」では、「子どもたちが楽しそうだから」が57%(4名)、「子どもたちの交流のため」が15%(1名)、「子どもが行きたいと言ったため」が14%(1名)であった(N=6)。
- ・「現在、8月～2月までの期間で概ね月1回開催です。そこで子ども食堂の開催の頻度についてどのように感じていますか？」では、「ちょうどよい」が71%(5名)、「やや少ない」が29%(2名)であった(N=7)。

④子どもの学習支援について

子どもの学習支援に対しては5つの設問を行った。概ね肯定的な回答が多くみられた。そのなかで子どもの学習支援の単独開催がある場合は、参加させたい意向が約9割であった。また開催場所では、最も開催数が多い名寄市文化センター以外に、市立大学や風連町での開催を望んでいることがわかった。

- ・「今後も子どもの学習支援についてお子さまを参加させたいと思いますか？」では、「ぜひ参加させたい」が86%(6名)、「やや参加させたい」が14%(1名)であった(N=7)。
- ・「子どもの学習支援にお子さまを参加させる動機は何ですか？」では、「子どもたちが楽しそうだから」57%(4名)、「大学生から勉強を教えてもらえるため」が15%(1名)、「子どもが行きたいと言ったため」14%(1名)であった(N=7)。
- ・「今年度の子どもの学習支援は、子ども食堂との同日開催のみです。そこで子どもの学習支援の頻度についてどのように感じていますか？」では、「ちょうどよい」が86%(6名)、「やや少ない」が14%(1名)であった(N=7)。
- ・「今後、子どもの学習支援のみの開催がある場合、お子さまを参加させたいと思いますか？」では、「ぜひ参加させたい」が57%(4名)、「やや参加させたい」が29%(2名)、「どちらとも言えない」が14%(1名)であった(N=7)。
- ・「もし、今後、子どもの学習支援を開催するのに、ふさわしいと思う場所はどこですか？(複数可)」で最も多かったのは、「名寄市文化センター」であった。次いで「名寄市総合福祉センター」と「名寄市立大学」であり、「名寄市地域交流センター(風連町)」と「その他」であり、その他では、「風連(町)」

で（開催）してほしい」（括弧は筆者加筆）との回答が記述されていた（N=7）。

⑤広報・周知の手段

これまで本プロジェクトでは、いくつかの手段を用いて広報・周知を行ってきた。今回の予備的アンケートでは、子どもや保護者が最も情報を得ている手段を明らかにした。それは開催ごとに周知される学校から配布されるチラシであった。

- ・「子ども食堂・子どもの学習支援・子ども居場所づくりをどのように知りましたか？」では、「学校から配布されるチラシ」が100%（7名）であった（N=7）。

⑥予備的アンケートのまとめ

以上のように予備的アンケートでは、少ないサンプリングではあったものの回答者は概ね、本プロジェクトに対して肯定的な回答が多く満足している様子であった。その中で子どもの学習支援の単独開催については、9割が参加させたい意向を示し、2016年度のように単独開催の実施は再考に値する。この点は、さらなるニーズ調査と担い手（供給）の状況とのマッチングとなるため、2018年度に具体的な検討を行っていきたい。また、開催場所の多様化の要望も少なからずみられた。この点は本プロジェクトにおいて開始前からの課題である。今回の予備的アンケート結果も踏まえ、検討する必要がある。

4. 考察

ここでは2017年の本プロジェクトの評価や課題を主に2点に絞り、考察していく。

第1に、本プロジェクトの連携体制の維持と継続性である。2017年度は2016年度に確立した実施体制を若干の変更を加えながら維持することであった。行政や教育委員会、大学、社会福祉協議会等の連携体制は維持できていることから、連携体制の維持と継続は達成することができた。そして2017年度は、4月～8月にかけては定期的に関係機関同士の会議や打ち合わせ等を実施することができた。また評価できる点は、コミュニティケア教育研究センターがコーディネートを担い連絡調整、会議の設定等を行ったことにより、関係機関の連携を円滑にすることができた点である。

第2に、本プロジェクト参加者（子ども・保護者）の満足度が概ね良好であったことである。2017年度は、小規模であったが保護者に対してアンケート調査を実施し効果測定を行った。

改善や検討を要する点は、主に2つである。ひとつは、子ども食堂開催時の子どもの調理への参加についてである。2017年度の活動を通じて、子どもたちから調理に参加したいという希望や学生メンバーからも調理参加させた方が子どもたちの交流になるのではないかという意見がみられていた。2018年度の活動において、よりよい方法で子どもたちの参加できる仕組みや仕掛けをつくるかの具体的な検討が課題となる。

もうひとつは、学生メンバーの学年の変化である。2016年度の創設時のメンバーは2017年度ですべて卒業となった。そのため2017年第1回目の開催では創設時のメンバーもいたが、それ以降は就職活動や卒業論文作成、国家試験対策等のため参加が難しくなり、その間に新1～2年が学生メンバーの主体となった。そのため本プロジェクトの目的（ねらい）等が共有されていなかったり、ノウハウが伝承されなかったりする状況がみられた。次年度以降は、学生メンバーを対象としたオリエンテーションの開催時期や回数に工夫や改善が必要である。

5. 結論

本稿では、2017年度に開催された本プロジェクトの実践報告を中心におこなってきた。紙幅の都合もあり、生活困窮世帯を対象とした子どもの学習支援や子どもの学習支援に関するアンケート調査結果は省いてある。これらは別稿にて詳細に報告する予定である。それらを踏まえても2017年度の本プロジェクトの実践活動は、多くの人々や機関・団体、担い手に支えられ継続・維持することができた。そのうえで今後の課題をあげて

いきたい。

1) 本プロジェクトの実施内容の再検討

本プロジェクトの2016年度と2017年度の実施状況から運営やその内容等について課題がみえてきた。それは主に3つである。ちなみに最初のあげる2点は既に、「4. 考察」にて先述しているが、あらためて今後の検討課題・再検討事項として、ここで整理しておきたい。

第1に、子どもたちの調理過程への参加の仕組みづくりの検討である。この点は2018年度の実践活動を通じて、より良い方法や仕掛け、仕組みづくりを検討していきたい。

第2に、子どもの学習支援の内容（環境づくり）と開催である。まず、子どもの学習支援の内容・環境づくりは、勉強する子どもたちが集中できる環境を整える必要がある。これは2017年度の実践活動によって顕在化した。そのため2018年度は会場内で学習に集中できる環境をできる限り整えることが課題となる。

第3に、開催方法である。2016年度は子どもの学習支援のみの開催をおこなってきたが、2017年度は、子ども食堂開催時に統一した。しかし学生メンバーや保護者から少なからず、子どもの学習支援のみの開催の要望もみられた。この点は2018年度の検討課題となるであろう。

2) 担い手の多元化の検討

本プロジェクトの担い手は、2016～2017年度は、基本的に学生メンバーを中心にしておこなわれてきた。2018年度は学生メンバーとともに、担い手の多元化を図っていきたい。ここでいう担い手の多元化とは、地域の人々に加わってもらい本プロジェクトの担い手の供給を持続可能なものにすることである。この点は、2018年度に具体的な検討と仕掛けづくりをしていきたい。

3) 機関・団体との連携強化

本プロジェクトは現在、行政、教育委員会、社会福祉協議会、大学がコーディネートを担当しており運営実施されている。今後、各関係機関・団体のさらなるつながりの強化とともに、社会福祉法人やNPO法人、各学校等との連携を強化していくことを検討していきたい。この場合、機関や団体の組織体に限らず、個人との連携も踏まえ検討していきたい。

4) 子どもと家庭のニーズ・生活調査の検討

本プロジェクトを含めて、子どもと家庭のニーズ調査や生活調査を実施し、そのうえで各種のニーズをしっかりと需要として把握する試みが重要となる。この点は2018年度の具体的な検討・取り組みとしておこなっていく。

以上、今後の主な課題を整理してきた。2016年度のスタートからの課題もあれば、2年目に顕在化した課題もある。また担い手の多元化の検討は、新たな課題というよりは、2016年度以前から計画していた課題であった。当初は、学生メンバーを中心に本プロジェクトの基礎を固め、2～3年後には地域の人々と共に実践していくというものであった。3年目を迎える今、具体的な検討に入っていきたい。

本プロジェクトが単発のイベントにならず、2017年度も継続できている要因は、この活動を支える人々の力である。今後もこの実践を蓄積し、「小さくても地域の中でできらりと光る実践（場）」としていきたいと筆者は思う。

謝辞

本プロジェクトを行うにあたり、各機関・団体、個人からのご協力とご支援をいただいた。まず謝辞への個人名の記載を辞退されたが感謝しなければならぬのが名寄市健康福祉部並びに社会福祉課等の皆さまであり、あらためて感謝申し上げる。本プロジェクトの実施継続は、健康福祉部、社会福祉課の皆様のご尽力がなければならなかったと思う。また、これまでと変わらずに本プロジェクトや私を支えて頂いた社会福祉課長に御礼申し上げる。

げたい。

名寄市教育委員会には、本プロジェクトへのご理解と具体的なお教示、チラシの配布等連携や関係の活用させていただいた。感謝を申し上げたい。

名寄市社会福祉協議会にも毎回の開催のご支援と保険加入では、ご教示とご迷惑をおかけした小笠原志朗氏に感謝申し上げたい。

本年度より実施体制を構築し、活動継続のためにご尽力いただいた名寄市立大学コミュニティケア教育研究センターのセンター長 結城佳子先生、参事 松田慎司氏、刀禰聡美氏に感謝を申し上げる。本活動の継続と安定的な運営は、皆様のご理解とご尽力が無ければ実現しなかったであろう。

本プロジェクトの実施継続では元名寄市立大学松岡研究室の和田開陸、持田実乃里、近藤絢香、尾形健太郎、大平萌加、そしてゼミ生ではないが本活動を支えてくれた信夫梨花、林川恵美に感謝申し上げる。そして新メンバーとして参加してくれた各学科の学生に感謝申し上げたい。次年度活動では中心的な役割を担ってくれると期待している。

さらに社会福祉学科の小野川文子先生、長谷川武史先生、江連崇先生に感謝申し上げる。小野川文子先生には、本研究の研究代表者であり、いつも大変な時に助けていただいた。

最後になったが、本プロジェクトに理解をいただき、活動を支えてくれた皆様と、子たちを送り出してくれた保護者の方々に感謝申し上げる。

本プロジェクトは、名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター事業並びに名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター「2017（平成 29）年度課題研究」（研究代表者・小野川文子）の助成の一部を受けて実施された。

文献

松岡是伸（2017）「名寄市における子どもの学習支援・子ども食堂・子どもの居場所づくりの実践 ―地域における各機関・団体の連携とスティグマの払拭を願って―」『地域と住民：コミュニティケア教育研究センター年報』1 巻（通巻 35 号），名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター，109-124.

佐古和廣（2017）「道北地域研究所を中心とした地域貢献」『大学評価研究』第 16 号，大学基準協会総務部，47-51.